

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	前川 直哉
論文題目	近現代日本における「男性同性愛者」アイデンティティの受容過程		
(論文内容の要旨)			
本論文は、主に1920年代から1970年代の日本において、同性に対して性的な欲望をもつ男性たちが、どのようなプロセスを経て「男性同性愛者」というカテゴリーとアイデンティティを受容したのか、そして彼らが直面した「悩み」がどのようなものであり、その解決法をどのような形で編み出していったのかを検証したものである。 序章「本論文の課題」では、問題意識の確認と先行研究の検討に基づいて課題の設定が行われ、同性に対して性的な欲望をもつ男性の主体性に注目すること、戦前と戦後を貫く視線を保持すること、ジェンダーに注目することが述べられている。 第1章「「男性同性愛者」の登場」では、1920年代の雑誌『変態性慾』に掲載された読者投稿が主に分析されている。大正期に流行した性欲学は、同性に対する性欲を「変態性欲」としながらも、それまで言語化できなかった性のあり方や欲望を「同性愛」という概念によって表現することを可能にした。また同性に対する性欲を道徳的問題から解放し、医学・生物学の範疇の問題であるとした。そのため同性に対して性欲を抱く多くの男性たちが、「同性愛」概念を受容していったという。そして自らを「男性同性愛者」と規定した投稿者たちは、「周囲に打ち明けられない悩み」「相手探しの困難」「結婚をめぐる苦悩」の3つを語り、それらを解決する手段を探っていたことが述べられている。 第2章「「自分たちの城」を求めて：変態雑誌と『アドニス』」では、1950年代の変態雑誌である『人間探究』と『風俗科学』、『人間探究』から派生した『アドニス』、および『読売新聞』の「人生案内」欄に投稿された男性同性愛に関する相談が分析されている。『読売新聞』では、男性同性愛を病理視し、治療・善導の対象としつつも十分な治療法を提示できないという、大正期性欲学と同様の状況が見られたために、同性への性的な欲望を自覚する男性たちは、自らの欲望について語ることができる変態雑誌に集まっていった。『人間探究』は「同性愛者からの相談が多い」ことを理由に会員制同人誌『アドニス』を創刊したが、『アドニス』において会員たちは仲間意識を強め、自分たちが同一のカテゴリーに属する人間であることを確かめあった。また『風俗科学』は、ネガティブ・イメージがある「変態性欲」ではなく、「そどみあ」という語を用い、同性愛を自覚する男性たちをエンパワメントしていった。そして『風俗科学』が多種多様なセクシュアリティが混在する雑誌であるがゆえに、当事者男性たちは自らのセクシュアリティの外縁を設定し、積極的な意見表明を行っていた。これらのことを通して、同性愛を自覚する男性たちは、自らのアイデンティティを強化し、「周囲に打ち明けられない悩み」を緩和すると同時に、会員制組織を通して匿名での「相手探し」を可能とする手段を編み出していったのである。 第3章「クローゼット・メディアの完成：『風俗奇譚』から『薔薇族』へ」では、1960年代の変態雑誌『風俗奇譚』に注目し、そこで『薔薇族』創刊につながる動きが準備されていったことが検証されている。もともと『風俗奇譚』は男性同性愛に強い関心をもっていた雑誌ではなかったが、男性同性愛を自覚する読者たちと編集部との相互行為を通して男性同性愛コンテンツを充実させていき、男性同性愛とその他の記事が「雑誌内別居」していった。このような『風俗奇譚』の動きをうけて創刊されたのが、わが国初の男性同性愛専門誌『薔薇族』であり、これによって、同性愛を自覚			

する男性たちは、三万部という部数を誇る商業メディア誌を手に入れることになる。このように同性愛の当事者男性たちは、「男性同性愛者」としてのアイデンティティを利用しながら、大正期から続いてきた「誰にも打ち明けられない悩み」を癒す方法を見出し、「相手探し」の困難を徐々に解消していったのである。

第4章「「結婚をめぐる苦悩」への対応」では、3つの苦悩のなかで残された「結婚をめぐる苦悩」が論じられている。すなわち、『アドニス』や『薔薇族』に掲載された結婚をめぐる記事と読者投稿を史料としながら、男性同性愛者が模索した異性との結婚のあり方が検討されている。結婚のあり方には、「妻に隠れて同性と交際」「理解ある妻に告白」「女性同性愛者との結婚」の3つの類型があったが、「異性との結婚」と「同性との交際」の両立が求められた。そして、「結婚しつつ、妻に内緒で男性とも交際する」ことが、現実的に最も多くのものを得られるライフスタイルとして、多くの男性同性愛者に支持されていったことが述べられている。

終章「「同性愛者」アイデンティティとジェンダー特権の利用による「悩み」の解決」では、各章のまとめが行われ、それらを通して全体的な考察が行われている。同性に性的な欲望を感じる男性が抱いていた悩みは、大正期から戦後まで大きく変わらなかったが、その悩みを解決するために、彼らは「同性愛者」というアイデンティティに依拠しながら、自身の悲惨な境遇をアピールすることによって同情や共感を誘う「憐れみの戦術」と、同性愛者の数は決して少なくないという「数の戦術」を用いていた。また彼らは男性として、男性と女性の非対称なジェンダー構造からもたらされる特権を無自覚に利用していたことが指摘されている。

(論文審査の結果の要旨)

大正期に流行した性欲学は、同性に対する性欲を「変態性欲」としながらも、それまで言語化できなかった性のあり方や性欲を「同性愛」という概念によって表現することを可能にした。そして、同性に性的な欲望をもつ男性たちは、自らを「男性同性愛者」と規定し、「男性同性愛者」というカテゴリーを受容していくことになる。彼らはいったいどのように「男性同性愛者」というカテゴリーとアイデンティティを受容したのか、そしてそのことがどのような意味をもっていたのか。これらの問題を、主に1920年代から1970年代の雑誌メディアの投稿欄を通して考察したものが、本論文である。近現代日本における男性同性愛に関する歴史研究は、未だ十分な研究蓄積がない領域であるが、本論文は、以下の点において画期的であり、これまでの研究状況を大きく進展させたといえることができる。

第一に指摘できることは、徹底して当事者の声にこだわり、当事者男性が何を考え、どのように行動したのかを明らかにしたことである。そのため申請者は史料として、1920年代の『変態性慾』、1950年代の『人間探究』『風俗科学』『アドニス』、1960年代の『風俗奇譚』、そして1970年代の『薔薇族』を渉猟し、それぞれに存在した投稿欄に掲載されている彼らの声を丁寧に検討している。投稿欄の分析を通して当事者男性の主体性に迫ろうとする方法、しかも1920年代から1970年代までの比較的長いスパンにおける変化を探ろうとする志向性は、これまでの研究に見られない斬新なものである。

本論文の第二の意義は、これらの史料の検討から次の点が明らかになったことである。①同性に性的な欲望を感じる男性は、「周囲に打ち明けられない悩み」「相手探しの困難」「結婚をめぐる苦悩」をもっていたこと、②彼らが「男性同性愛者」というアイデンティティを利用しながら、雑誌の誌面作りへの要望を表明し、そのことを通して「周囲に打ち明けられない悩み」を緩和するとともに、会員制組織によって、匿名での「相手探し」を可能とする手段を編み出していったこと、③自分たちの欲望が「変態性欲」と周縁化されたことを逆手にとり、自身の悲惨な境遇をアピールすることによって同情や共感を誘う「憐れみの戦術」や、自分たちの数は決して少なくないことを表明する「数の戦術」を取ったこと。最終的には、彼らは発行部数が三万部の商業雑誌である『薔薇族』という強力なクロゼット・メディアを手に入れることになるが、そのことを申請者は、自身の欲望を周囲に秘したまま充足させるという方法で、悩みの解決を図ったととらえている。

第三に指摘できる本論文の意義は、同性に性的欲望を感じる当事者男性の声を分析するに際して、ジェンダーの視点を取り入れていることである。これまでジェンダー研究とセクシュアリティ研究とは、別個の研究者によって行われることが多かった。しかし申請者は、男性同性愛者が「男性」であるということに目を向け、そのことが彼らの悩みを解決するにあたって、どのような意味をもっていたのかを考察している。その結果、明らかになったのは以下の点である。①彼らが種々の雑誌に声をあげることができたのは、ポルノグラフィを掲載した変態雑誌を購読することを通して自身のリクエストを投稿し、紙面作りの方向付けを行うことができたからであり、その背景には、ポルノグラフィを男性たちで独占するという非対称なジェンダー構造があったからに他ならないこと、②雑誌を買い支え、自分たちの思い通りのメディアを手に入れていくという行為は、自由になるお金が比較的多い男性だからこそ可能であること、③妻に隠れて、あるいは「理解ある妻」に告白したうえで同性と交際できるのは、男性が家庭外で性的な関係をもつことが大目に見られるという性のダブル・ス

タンダードが存在していたからであること。申請者は、男性同性愛者たちが男性であるがゆえに、これらの特権性に対して無自覚だったと指摘しているが、このような指摘は先行研究にはまったく見られないものであり、従来の研究水準と一線を画するものであるといえるだろう。

これらの点において、本論文は近現代日本における男性同性愛に関する歴史研究に新しい知見をもたらしたということができ、歴史研究のみならず、日本における男性同性愛者運動の特質を考察するにあたっても、大きなインパクトを与える論文であると思われる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年5月27日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降